

内部質保証と教育の体系化・国際化

—すべては教育の現場から—

公益財団法人
日本高等教育評価機構
評価充実協議会

2013年7月9日
於. アルカディア市ヶ谷

鈴木 典比古

公立大学法人
国際教養大学
理事長・学長
（公）大学基準協会
前専務理事
国際基督教大学
前学長

1. 内部質保証の構造と教育体系化と国際化 ーすべては教育の現場からー

『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』
(中央教育審議会、平成24年8月28日) ー答申ーより、

1. 大学の役割と今回の答申の趣旨 (6~10頁)

「我が国の現在の状況に鑑みれば、グローバル化の加速する社会において活躍できる人材の育成の重要性が増している事は論をまたない。そのために高等教育が果たすべき役割は極めて大きい。」

2. 大学教育の質保証と向上

(学士課程教育の質的転換)

- 「・・・このような時代に生き、社会に貢献していくには、想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を見定める能力が求められる。
- ・・・生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生から見て受動的な教育の場では育成することが出来ない。
 - ・・・学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。
 - ・・・学生には事前準備、授業受講、事後展開を通して主体的な学修に要する総学修時間の確保が不可欠である。」

3. 学修時間の確保

大学設置基準が想定している一般的な学期中の
1日当たり総学修時間の算定

卒業要件 = 124 単位、1 単位 4.5 時間

(授業 1 時間 + 関連する学修時間 2 時間) × 1.5 週

1 学期で習得すべき単位 = 124 単位 ÷ 4 年間 ÷ 2 学期 = 16 単位

1 学期の学修時間 = 16 単位 × 4.5 時間 = 720 時間

1 週間の学修時間 = 720 時間 ÷ 1.5 週 = 480 時間

1 日の学修時間 (1 週間を 6 日間で計算 480 時間 ÷ 6 日 = 80 時間)

4. 中央教育審議会答申のまとめ－4点－

「学修時間の実質的増加・確保は、以下の諸方策と連なって進められる必要がある。」（15頁）

《教育課程の体系化》

- －学位授与方針に照らして適切な授業科目履修数（1学期当たり16単位）
- －1科目当たり学修量（1科目2単位×45時間＝90時間）
- －科目番号制（コース・ナンバーリング）による科目関連間や順次性・体系性の確立

《組織的な教育の実施》

- －授業科目内容は教員個人の自由に委ねられているのではない
- －教員全員の参画と協力による教育課程の体系化
- －大学、学部、学科毎の理念の必要・目標の明確化と理念・目標達成のための教育プログラム

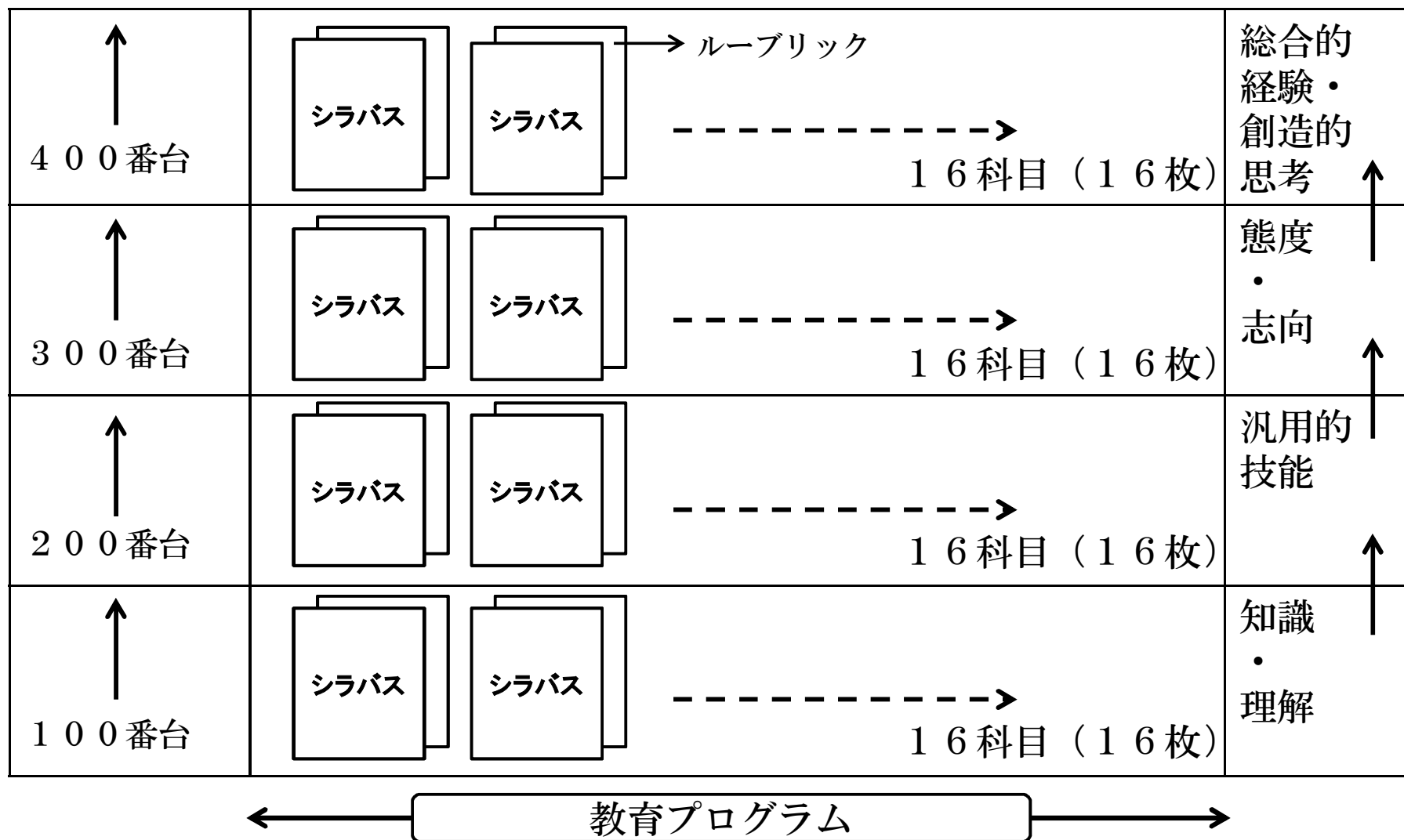
《授業計画（シラバス）の充実》

- －シラバスは授業工程表であり、単なる講義概要（コースカタログ）ではない。
- －学生が予習できるシラバス←受動的受講から双方向の授業への転換には「予習のできるシラバス」が不可欠

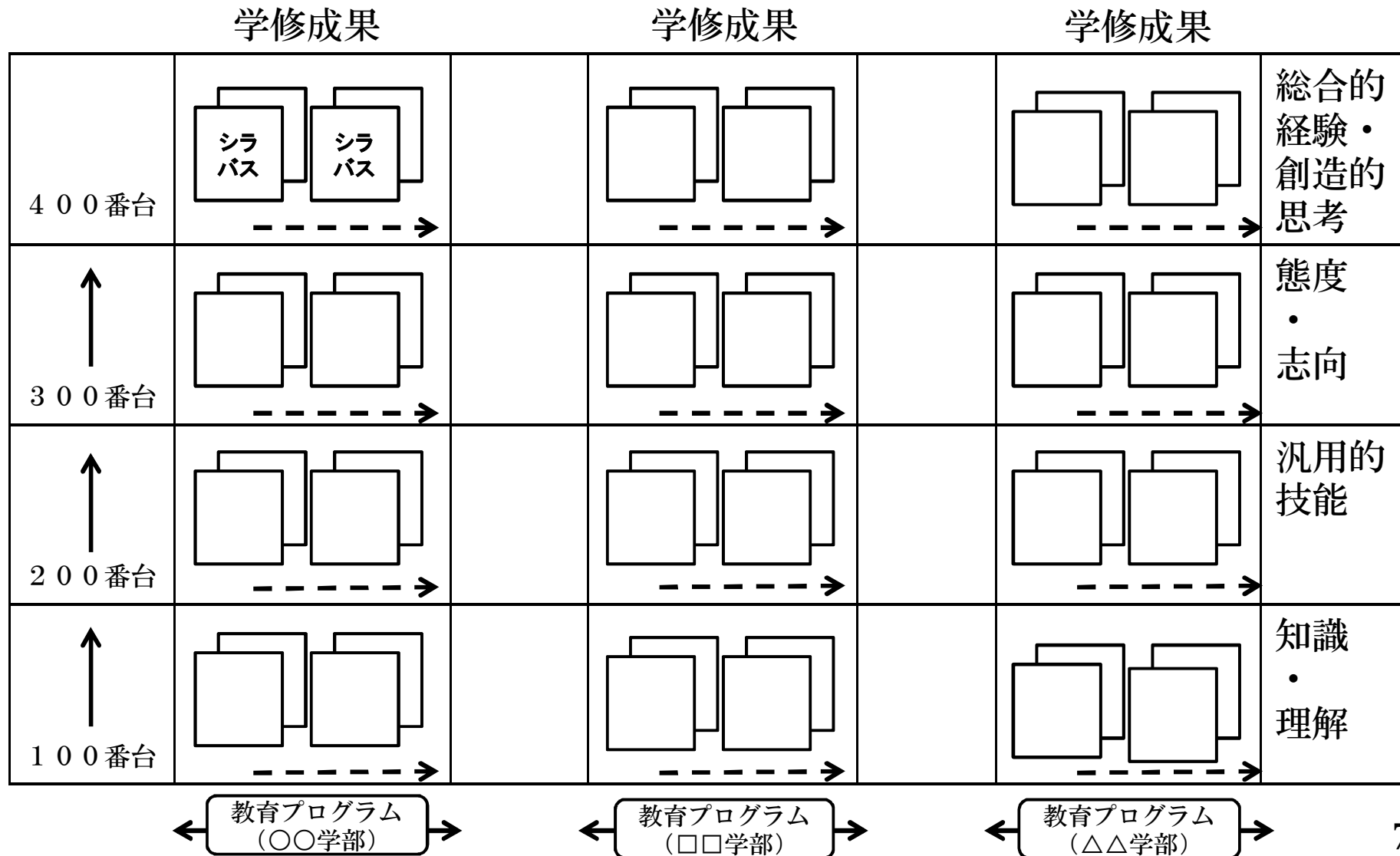
《全学的な教学マネジメントの確立》

- －教員の教育力の向上が大前提
- －学長のリーダーシップによる全学の教学マネジメント

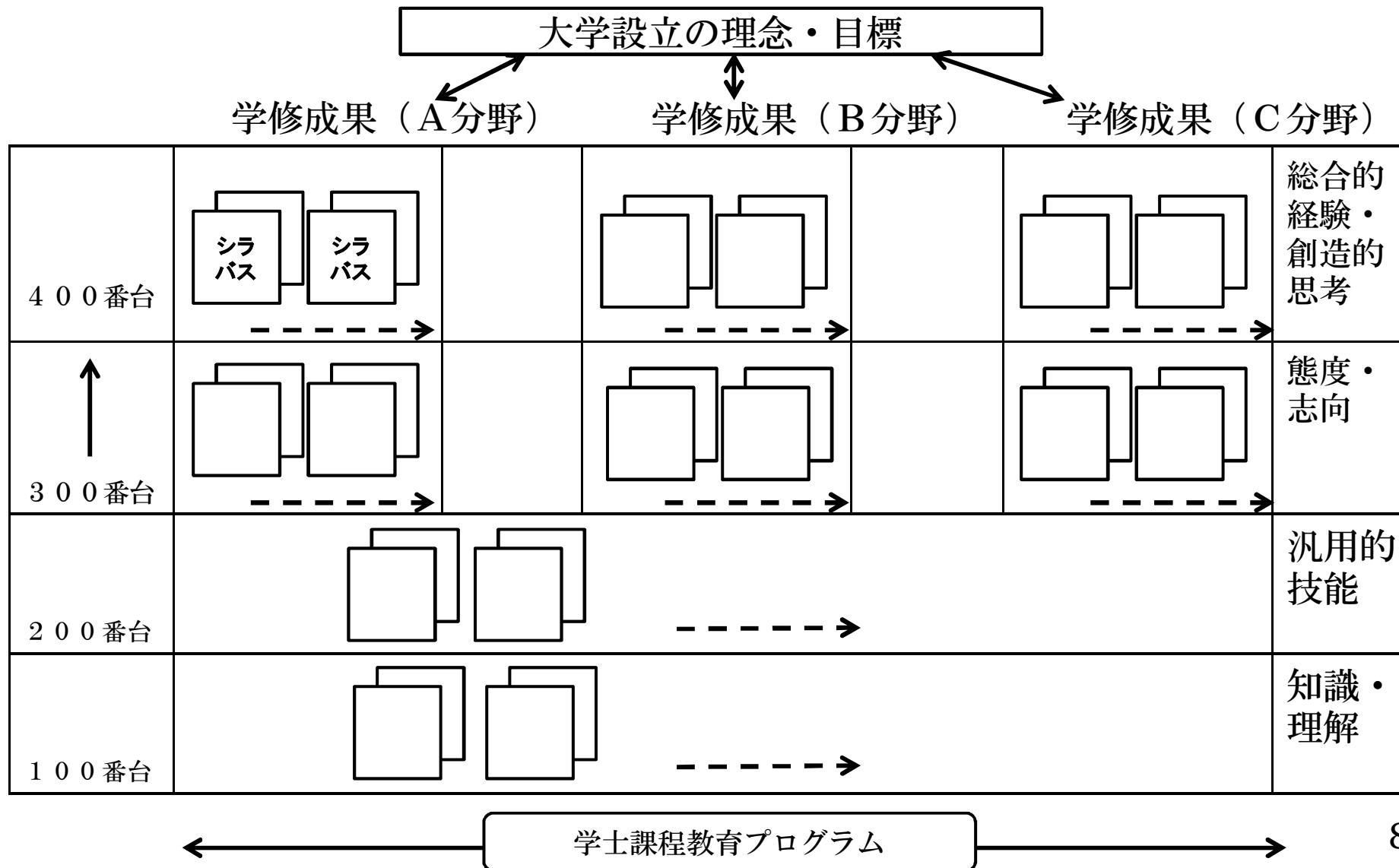
5. シラバス・ルーブリック・科目番号制・学士課程 —学士課程教育プログラム体系化の構造—



6. シラバス・ルーブリック・科目番号制 — 専門学部制の場合 —



7. シラバス・ルーブリック・科目番号制 — 学士課程教育の場合 —



8. シラバスの構造と役割

1. 授業科目名、科目番号、Pro-requisiteの有無
2. 科目の目標と学習効果
「この授業科目は〇〇を目標にしています。学生諸君はこの科目を受講する事によって・・・を理解、修得、実践できるようになります。」
3. オフィスアワー、研究室
4. 使用テキスト名（「参考文献は授業中に指示します」では不十分）
5. 各授業ごとのー
 - ①テーマ（具体的な章、節などを明示。ページ箇所も含む）
 - ②授業進行形態（講義、グループ討議、その他）
6. 試験方法ー中間試験、最終試験、プレゼンテーション、授業出席、グループワーク、その他
7. 成績評価ーAは100～90%、Bは89～80%、Fは59%以下
8. アカデミック・インテグリティについて
9. アピールについて
10. 学生による授業評価について（全学的な統一様式と項目による）
授業を批判するためでなく授業を改善するために行うことを明記

9. ルーブリックについて

- 目標に準拠した評価のための基準の作成方法であり、学生が何を学修するのかを示す評価基準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクス形式での評価指標。
- 記述により達成水準などが明確化されることにより、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある。
- コースや授業科目、課題（レポート）などの単位で設定することができる。

○課程についてのルーブリックの例

関西国際大学 コモンルーブリック（リサーチ） 2年制秋学期～（上位学年用）

	3	2	1	0
テーマのたて方 （調査目的の設定）	独創的で、明確なテーマ が設定されていて、それ についての			
これまでに明らかにさ れている知見の活用				
研究方法と分析の視点				
分析				
結論				

10.科目番号化によるカリキュラムの構造化と体系化 —標準化と多様化の同時達成—

400番台	Capstone Courses	(卒論等総仕上げ)	 専門 基礎
300番台	Advanced Courses	(上級レベル)	
200番台	Intermediate Courses	(中級レベル)	
100番台	Introductory Courses	(初級レベル)	

1 1 .学士課程教育の学習成果 (Learning Outcomes)

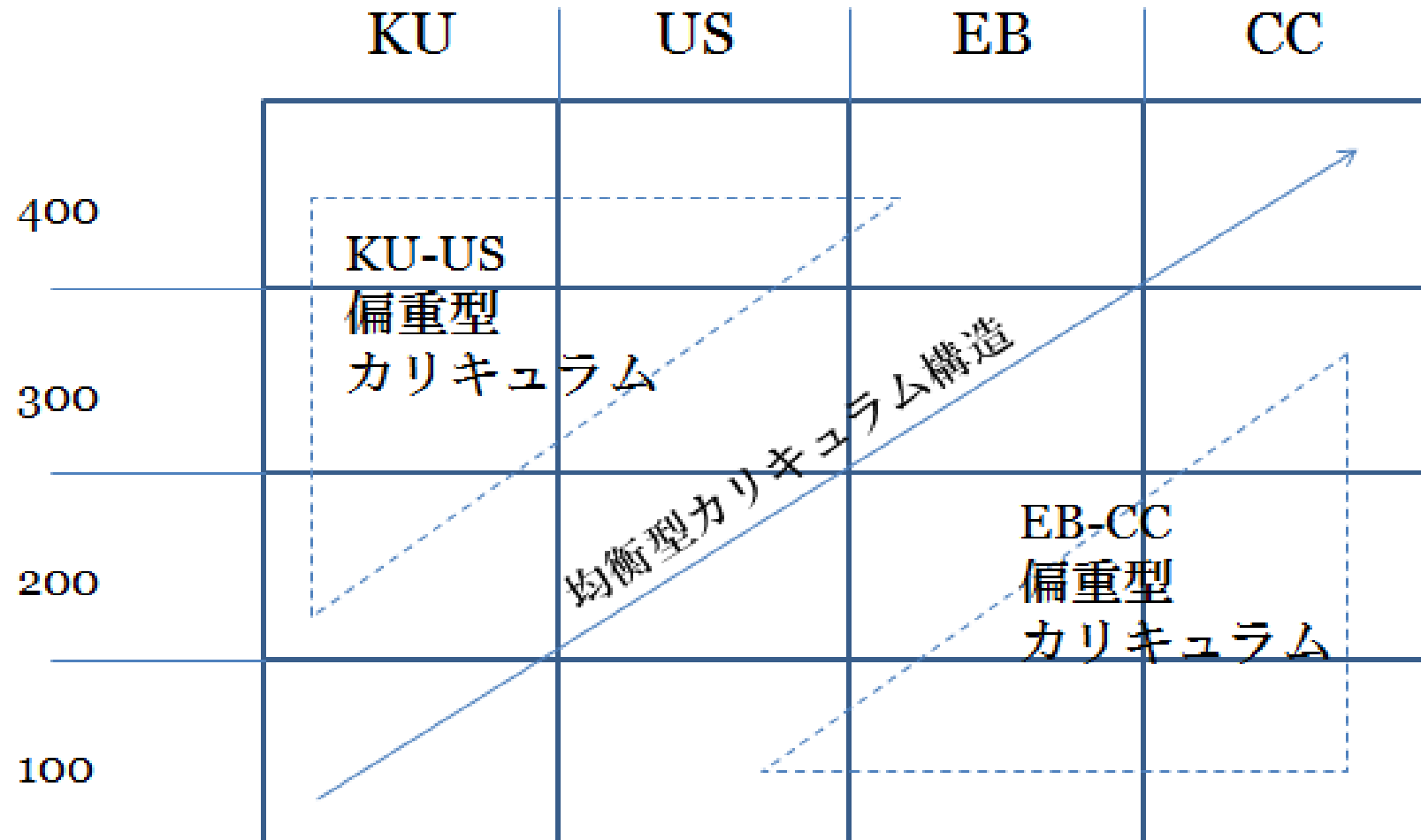
第1段階・・・知識・理解と把握 (KU)

第2段階・・・汎用的技能の修得 (US)

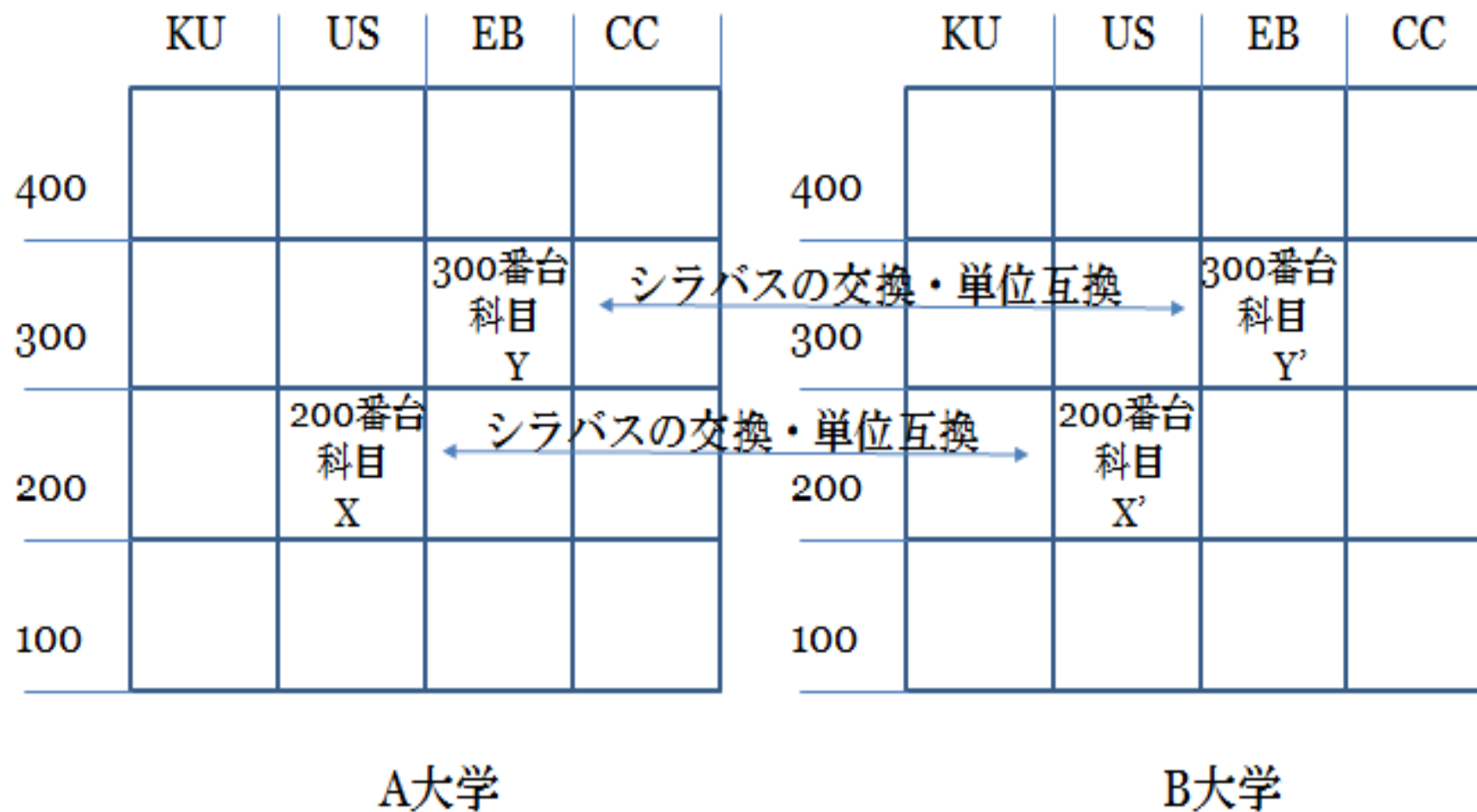
第3段階・・・態度・志向性の涵養 (EB)

第4段階・・・統合的学習経験と創造的思考力発揮 (CC)

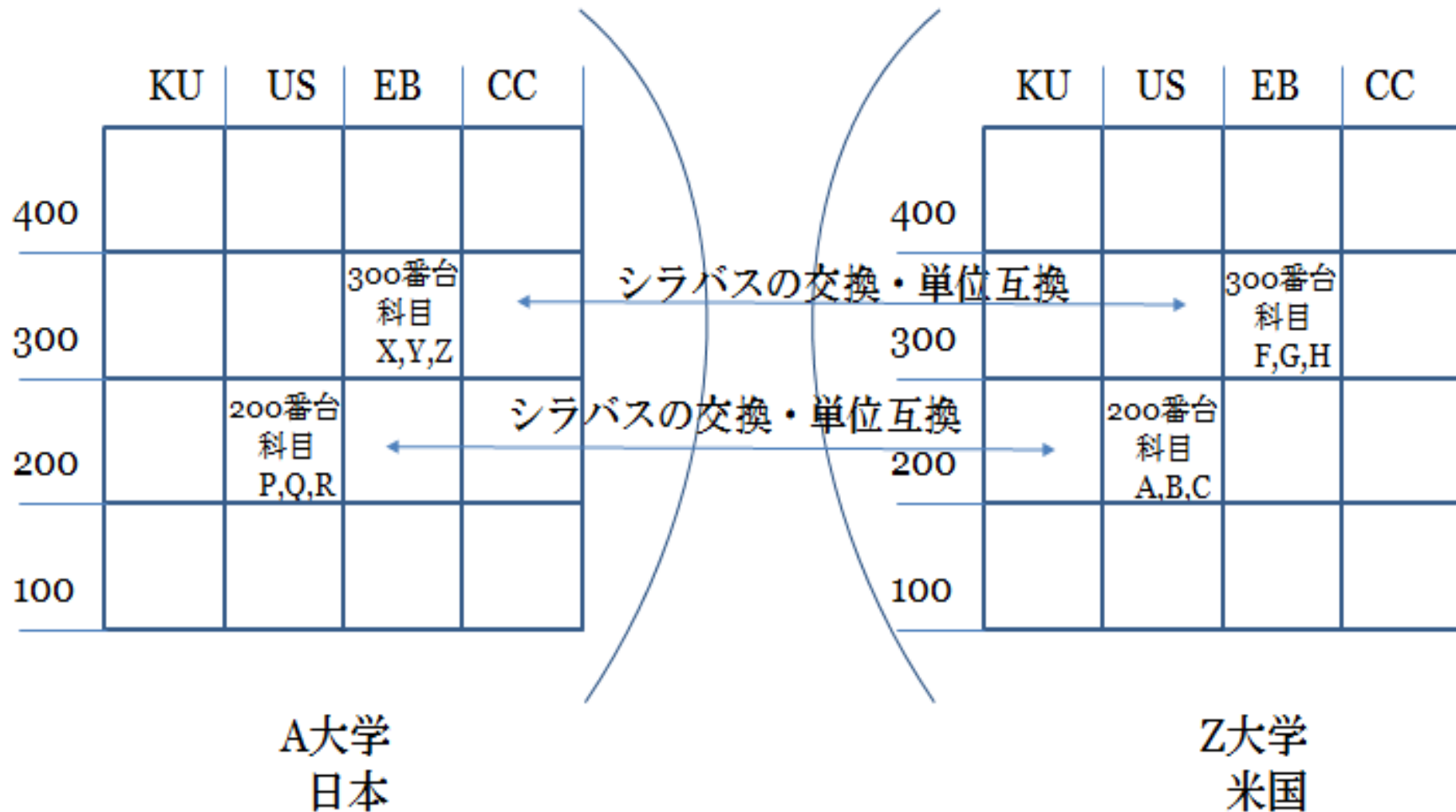
1 2. 学士カマップの構築



1 3.国内大学間学生渡り鳥制度



14. 海外大学との間の学生渡り鳥制度



1 5 . 内部質保証と大学認証評価

－ 大学基準協会の第 2 期 －

- 内部質保証システムの構築とその有効性を重視した評価
 - 「質保証に対する第一責任主体は、大学自身である。」との考えを基盤としたシステム。
 - 大学評価の主役は、大学である。

- 内部質保証システムとは
 - PDCAサイクル等の方法を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習その他サービスが一定水準にあることを大学自らの責任で説明・証明していく学内の恒常的・継続的プロセス。（『大学評価ハンドブック』（大学基準協会））

1 6 . 内部質保証システムの構築に必要な条件

- 質保証に責任を負う部局の明確化と、システムを動かす部局の設置（明確化）
- 内部質保証の3つの側面への留意
 - 大学全体（システム）レベル、プログラムレベル、授業レベル
- 目的、目標の明確化と構成員による共有
- 検証システムの確立と、学外者の参画
 - エビデンスに基づく評価（データの収集、ベンチマーク指標の設定・活用）
 - 学習成果（ラーニングアウトカムズ）の評価
- 検証結果の活用システムの構築－PDCAサイクルの推進
- 情報公開の推進－大学自らが一定水準にあることを説明・証明
- 認証評価との連動

17. 第2期の課題（大学基準協会） －2011年、2012年の認証評価を実施して－

- 内部質保証の概念の定着状況に関わる課題
- 社会に対する説明責任に関わる課題
- 多様な大学の特色・個性を伸長させるという点からの課題
- アウトカム評価の有効的活用に関わる課題
- 大学や評価者の負担軽減に関わる課題

1 8 . これからの認証評価（第3期）に向けた改革方向

- 内部質保証システムの有効性を重視した評価の徹底推進
 - 自己点検・評価結果の改善・改革への連動
 - エビデンスに基づく自己点検・評価
 - 内部質保証システムの概念の明確化と啓発活動
 - 大学の評価担当者の育成方法の検討
- 厳格な質保証の仕組みの整備と、社会に対する説明責任の履行
 - 質保証機関として社会に対する説明責任を果たすために、大学としての基礎的要件の充足状況を一層厳格に実施。
 - ステークホルダーにも理解しやすい評価結果のあり方の検討
 - 英文による評価結果（概要）の作成・公表

18. これからの認証評価（第3期）に向けた改革方向 （続き）

- 多様な大学に適切に対応した評価の実現
 - 設置形態、分野構成等に適切に対応した評価の実施
 - 大学が到達しようとする質的水準の違いを踏まえた多段階的評価項目の設定
 - 大学が特色・個性に応じて選択できる評価項目の設定
- アウトカム評価の有効にとりいれた評価の実現
 - 大学が自らの教育研究活動等の達成度をより容易に把握し、改善・改革に対する問題や課題を実感する契機となる仕組みを提案する。
 - アウトカム・アセスメントの事例紹介
 - 大学の質的向上に資するための、ルーブリック形式の参照資料の大学への提示

18. これからの認証評価（第3期）に向けた改革方向 （続き）

- より効率的大学評価の実現のための、大学及び評価者の負担軽減
 - 国・公立大学法人評価等、他の評価事業との重畳的状况を軽減する措置の検討。
 - 一定水準を満たしている大学に対して評価項目を絞るなどの負担軽減措置の検討。



19. In-Class Quality Management

—全ては教育の現場から

20 .In-Class Quality Assuranceのための Benchmark用具

- (1) シラバス－In-Class QAのための工程表
- (2) 教員用のベンチマーク用具－In-Class QAの熟練工
 - シラバス、試験・プロジェクト・グループ活動、
オフィスアワー、TA、GPA
- (3) 学生用ベンチマーク用具－In-Class QAの素材
 - 毎授業時コメントシート（授業内容に対する質問票）、
科目評価と教員評価、授業参加調査（the Student Class
Engagement）、学生の成長の記録（the Student
Portfolio）、卒業時学修達成度調査（the Student
Exit）、卒業生キャリア評価（the Alumni Career
Engagement）
- (4) 大学行政用ベンチマーク用具
 - ハラスメント防止、アカデミック・インテグリティ遵守

21. 授業は教員と学生のコラボレーション

教員用ベンチマーク用具

- シラバス →
- 試験・プロジェクト・グループ活動 →
- オフィスアワー →
- TA →
- GPA →
- カウンセリング (専門家) →

ダイナミック
な
In-Class
Quality
Assurance
—シラバス
(工程表)を
基礎とする—

学生用ベンチマーク用具

- ← ➤ コメントシート (授業内容に対する質問票)
- ← ➤ 科目評価と教員評価
- ← ➤ 授業参加調査
- ← ➤ 学生の成長の自己記録
- ← ➤ 卒業時学修達成度調査
- ← ➤ 卒業生キャリア評価

- ハラスメント防止
- アカデミック・インテグリティ遵守

2 2. 教員と学生の授業コラボレーション三態

- (1) 講義主体の授業－KU, US型

学士力 = f (教育力)

(例) 教壇からの講義と学生のノートテーキング

- (2) 教員と学生の共同作業－EB, CC型

学士力 = 教育力

(例) ケース分析やディベート、課題発表

- (3) 学生のイニシアティブによるクラス運営－CC型

教育力 = g (学士力)

(例) 学外インターンシップ、海外サービスラーニング

ダイナミックなIn-Class QAは上記の1.、2.、3.の三態が授業の中で交互に演出されていくことである。



ご清聴ありがとうございました

<プロフィール>

氏 名：鈴木 典比古（すずき のりひこ）
生年月日：1945年5月30日生まれ
出 身：栃木県那須郡黒磯町（現那須塩原市）
専門分野：経営学
現 職：公立大学法人国際教養大学 理事長・学長

（学歴）

1968年3月 一橋大学経済学部卒業
1972年3月 一橋大学大学院 経済学修士
1978年1月 インディアナ大学 経営学博士(DBA)

（職歴）

1978年8月～1982年1月 ワシントン州立大学 助教授
1982年2月～1982年8月 ワシントン州立大学 准教授
1982年9月～1986年8月 イリノイ大学 助教授
1986年9月～1990年3月 国際基督教大学 准教授
1990年4月～2012年3月 国際基督教大学 教授
1991年4月～1992年3月 ワシントン大学客員教授
2000年4月～2004年3月 国際基督教大学 学務副学長
2004年4月～2012年3月 国際基督教大学 学長
2012年4月～2013年5月 公益財団法人大学基準協会 専務理事
2013年6月～ 公立大学法人国際教養大学 理事長・学長（現在に至る）

現在、中央教育審議会大学教育部会委員、大学設置・学校法人審議会委員、
国立大学法人評価委員会委員

（著書等）

『多国籍企業経営論』（同文館、1988年）経営科学文献賞、『国際マーケティング』（同文館、1989年）、『企業戦略と国際関係論』（有斐閣、1995年）、『多国籍企業と国際関係の統合理論』（国際書院、1997年）、『国際経営政治学』（文眞堂、2000年）、また、Journal of International Business Studies, Academy of Management Journal, International Management Review, Asia-Pacific Journal of Management, The Columbia Journal of World Business 等に論文多数

（以上）